

YYJKからのお知らせ

中区（本牧周辺）見学会のお知らせ

洋館付き住宅の見学会を開催します。

- 日時： 令和5年4月15日（土）・13:00集合、16:30終了予定
- 集合場所： 三溪園入口バス停（横浜市中区本牧大里町1）※三溪園の入口からは離れていますのでご注意ください
- 参加費： 無料
- 申し込み： 不要（当日集合場所へ直接お越しください） 当日連絡先：090-3697-9698

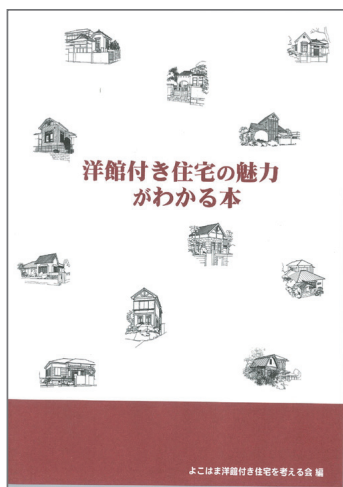
賛助会員を募集しています！！
（年会費1,000円）

※ 賛助会員に入会された方には、会報「ハイカラくらしすまい通信」をお送りするほか、各種イベントのお知らせもお送りいたします。

■振込先：郵便振替口座 00200-4-68787 よこはま洋館付き住宅を考える会

販売書籍のお知らせ

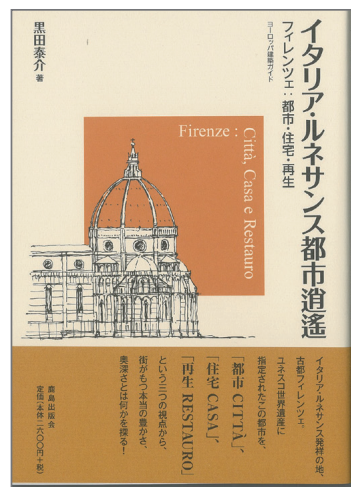
（※ 購入のお申し込みはEメールで yyjk@usc.yokohama まで）



『洋館付き住宅の魅力がわかる本』

洋館付き住宅の魅力や大正・昭和の暮らしの文化をわかりやすいイラストで案内するハンドブック。

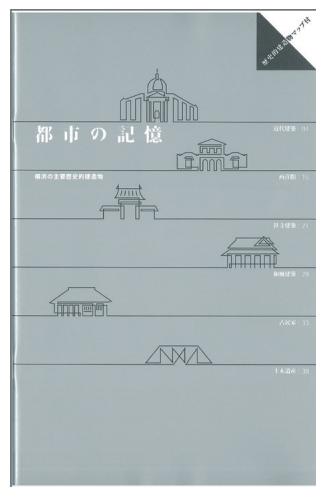
価格：800円（税込）
送料：100円
発行者：
よこはま洋館付き住宅を考える会



『イタリア・ルネサンス都市逍遙（しょうよう）』

ルネサンス発祥の地、世界遺産の古都フィレンツェ。都市・住宅・再生の視点から、街が持つ本当の豊かさを紹介する。当会顧問、関東学院大学教授、黒田泰介氏渾身の書き下ろし。

価格：2,600円＋消費税
送料：100円
発行者：鹿島出版会



『都市の記憶』
横浜の主要歴史的建造物
（現在欠品中）

近代建築、西洋館、社寺、古民家、土木遺産など近代都市横浜を象徴する歴史的建造物や文化財建造物を開設付き写真で紹介。ガイド地図を掲載。

価格：700円（税込）
送料：100円
発行者：
公益社団法人横浜歴史資産調査会

「よこはま洋館付き住宅を考える会」のご案内

洋館付き住宅の魅力を調べ、楽しみ、住み続けるための支援活動を非営利で進めています。

お問い合わせは下記の事務局まで。

会費（年額）／正会員 5,000円・賛助会員 1,000円（一口）・法人会員 10,000円（一口）

ハイカラくらしすまい通信 第49号 編集・発行：よこはま洋館付き住宅を考える会
〒240-0014 横浜市保土ヶ谷区霞台47-14（担当：兼弘）／E-Mail：yyjk@usc.yokohama
TEL:045-335-7164 / FAX:045-335-7176 / <http://yyjk.jpn.com/>



よこはま洋館付き住宅を考える会会報

ハイカラくらしすまい通信

第49号 2023年4月1日発行

旧静岡ハリストス正教会再建及びイコン画修復

特定非営利活動法人美術保存修復センター横浜
YYJK 正会員 内藤 朝子

2014年、静岡ハリストス正教会の司祭様より聖堂建替えにあたり、内部のイコン画の今後についてご相談いただきました。はじめに、この正教会聖堂の履歴をご紹介します。

1877年市内上石町伊勢屋にて開教しました。1883年市内人宿町に聖堂を新築しましたが、1889年焼失し仮会堂で移転を繰り返します。1911年市内本町5丁目に再建築されますが、1936年国道拡幅の為に内春日町に新たな聖堂が建てられます。1945年空襲により大半が焼失してしまいます。戦後から随分と経った1959年同地に生神女守護聖堂新築。2017年耐震問題により現聖堂に建替えられました。

この聖堂は、上記の通りに1959年に建てられたものですが、50年以上の年月が過ぎ老朽化が著しく、抜本的な処置が必要でした。材質は木造で静岡県耐震基準を全く満たしておらず、補強処置も困難な状態でした。2011年の東日本大震災の発生により「新聖堂建設」案が具体化され、ついに、十分な耐震性と耐久性を備えた

「木造による新聖堂建築」という案がまとまりました。聖堂躯体は現行より一回り小さく、それに相応したイコンスタス（正教会の聖堂建築で最も特徴的な、聖所と至聖所を仕切る壁）を建てる事が必要になりました。そこで大きな問題になったのが、現行聖堂のイコンスタスに納められた日本初のイコン画家イリナ山下りん作6点（上段から3段目6点）、ルカ日比和平作14点（上段及び2段目14点）をスペースに限りがある為、納めることができないという現実でした。特定非営利活動法人美術保存修復センター横浜ではこれを確実に保存し、教会全体の意思に合う機関としてこの20点を玉川大学教育博物館へ寄贈、修復をし、後世へ伝えることができるよう橋渡しを行いました。山下りんのイコン画はその他、イコンスタス、王門イコン画6点、至聖所内イコン画などを修復させていただき、2017年に完成した新しい聖堂にお納めいたしました。王門はかつてのロシア人捕虜の方々が製作し、帰国時に正教会へ贈られたものと伝えられています。



旧聖堂（1959-2016）



旧イコンスタス



現在のイコノスタス



ハリストス
左：修復前 右：修復後
王門生神女
クリーニング中



1959年の聖堂

山下りん (1857-1939) :
常陸国笠間藩 (現茨城県笠間市) 出身。幼い頃から絵を描くのが好きだったりんは、絵師になることを志して上京する。1877年明治政府が設立した工部美術学校に入学しアントニオ・フォンタネージに絵画技法を学ぶ。この頃正教会の洗礼を受け、聖イリナを授けられた。1880年同窓生の代わりにロシアの首都ペテルブルグの女子修道院に派遣され、イコン画技法を学ぶと共に西洋絵画を学んだ。予定の5年より早く2年で帰国し、神田駿河台の日本正教会・女子神学校に画室を構えイコン画の制作にあたった。りんのイコン画は国内各地の正教会に残され、いずれも西欧宗教画が強く表れた作風が特徴である。

日比和平 (1914-2000) :
東京の四谷正教会 (四谷神現教会) で生まれる。聖名ルカ。兄弟が日本人初の修道士になるなどの一族の環境により、幼少期からイコンを見て育った。1934年東京ニコライ堂の日本正教神学校に入学し、卒業後北海道の函館正教会の伝道師となった。静岡ハリストス正教会のために制作した14枚のイコン画は1971年に設置された。又、この頃に同教会の山下りんのイコン画を修復している。

※1959年聖堂成聖式の写真に見えるイコノスタス中央2段目山下りんの「最後の晩餐」は、現在浜松ハリストス正教会のイコノスタスに納められています

ガラスについて 12 ～ 日本の硝子生産 ～

今年の正月明け1月15日の朝日新聞朝刊に大学共通テストの問題が載っていた、国語問題内に関心ある多くの単語が目入り、目を通したところ、病床にあった正岡子規の部屋の硝子障子と近代建築の父ル・コルビジエの横長窓の視覚装置について興味深い文章が出題されていた。

明治末、子規は虚子の勧めで当時まだ高価な輸入品であった透明硝子を書斎の硝子障子にして庭先を見ることで癒された。一方ル・コルビジエは近代建築の象徴としてかつてない横長な窓など効果的な視覚装置として多様な用い方で、刺激的な近代建物を設計した。

前回のハイカラ通信で我が国の板硝子生産は各種の連続製造設備で「揺らぎ硝子」が大量生産され、世界一流の板硝子生産国となったところまで記述した。1964年(昭和39年)旭硝子と日本板硝子が共同でイギリスのビルキントン社のフロート法を導入した。フロート法とは完全に水平面をなす比重大の溶解金属の錫の上に浮かせた熔融硝子を流してある程度固化するまで他と接触しないため、非常に平滑で均一な板硝子を作成する画期的な技術革新製法である。製品の中は3m、長さ10m以上、最大厚さ25mmまで製造可能となる。更にメーカー各社で改良されている。この高品質低価格なフロート硝子が普及し、さらに素地板として各種機能板硝子が作られ現在も進化しつつある。

機能板硝子の例として・熱線吸収硝子・熱線反射硝子・強化硝子・高透過硝子・エコ硝子(Low-E)・耐熱硝子・調光硝子・抗菌硝子・合せ硝子(用途に応じて複数枚接着)等々多様性を有する。硝子の生産は莫大なエネルギー消費のため、生産方法も製品も地球温暖化や環境問題、省エネに対応して、機能硝子もますます進化して、我が国の生産技術は国際的にもリードしている。断熱については、特に身近な例として住宅や一般建物窓の断熱について最も冷暖房の負荷が大きいのは薄い部材厚と隙間を持つ開口部である。屋根や外壁は複層をなし、断熱材を入れることで効果は出るが、硝子一枚の窓は暖冷房の最も大きな負荷となる。冬期一枚硝子窓は外気で冷やされた硝子面の冷気が室内の床面を這い広がり、室内を冷やすコールドドラフトを起こし、部屋上下の温度差が大きくなり、快適と省エネを大きく損なう。対処として、窓の複層硝子化や2重窓の設置などで遮熱や断熱化を考えなければならない。複層硝子では2枚又は3枚の硝子の間に空気層又はガス封入層や真空層を設けて断熱効果を上げる。さらにLow-E硝子を使えばさらに効果は上がる。最も簡単なのは厚めで大き目のカーテンを掛けたり、既存硝子窓の内又は外にも一枚硝子窓を増設して断熱補強する。紙障子戸や雨戸も硝子戸を挟んで空気層を持つので、ある程度効果はある。我が家では掃き出し窓面の鋼製雨戸内側に安価な薄い断熱シートを張って、寒い夜間に硝子戸と障子戸の3重にして断熱化らしきことをしている。

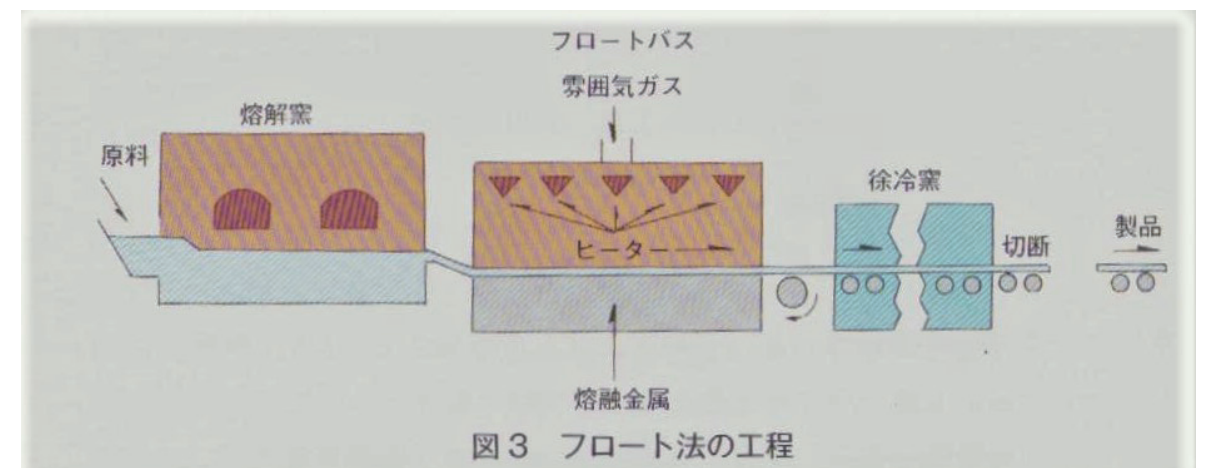


図3 フロート法の工程

令和5年2月の中旬、文化財に関して学ぶ課外授業の一環として横須賀市内の小学四年生およそ50人が私の家を訪れてくれました。

始めは子供たちにどの様に話せば良いのか悩みましたが、「となりのトトロで登場したサツキとメイの家みたい」と言うと子供達も意外に興味を持ってくれました。洋館の窓に多く使われている歪みのある古いガラスやダイヤガラスなど、また釘を使わずにほぞ継ぎをしてある玄関の框（かまち）を特に興味深く観察していました。今では少なくなった畳中心の間取りや縁側を見て回り、自分達が住んでいる家との違いを見つけっていました。

昔の家と現代の家との違い、なぜ洋館付き住宅は無くなっていくのか、文化財登録をしたかの理由など、沢山の質問を受け自分なりの考えを伝えました。

洋館付き住宅の家の造り方の特徴や近年の日本の住宅建設のサイクルの速さ、また、ヨーロッパとの文化の違いなど、短い時間では伝える事が難しい内容でしたが真剣に聞いてくれました。家だけでは無く、古い物を維持していく為には手間と時間、そしてお金も掛かります。今回の様に子供たちをはじめ、少しでも多くの人が身の周りの古い物に興味を持ち、大切に思ってくれる機会が訪れた事が文化財登録をした一番の意味となったのではないかと感じました。



洋館外観



表玄関



洋館内観



ほぞ継ぎ



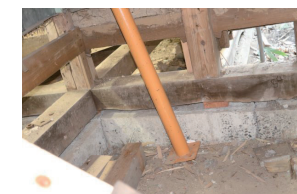
外観全景

前号（ハイカラ通信48号）に続き、磯子区の宮下邸改修工事の様子を報告します。工事はまず、耐震補強の耐力壁の設置箇所や改修する部屋の天井、壁、床を順次最小限の範囲を解体しながら現況調査を行った。不同沈下により最も変形が激しかった座敷の柱の建て直しと沈下の補整と腐朽した土台や柱の入替を行った。この部分には2階が載っていて、各部分への影響上無理に建物を揚げる事が出来ない為、沈下量10cmのところ7cmの揚げ代で止めた。

まず耐震補強に当たり、耐力壁取付力所の既存構造材の補修や補強、変形補正、既存軸組の補強金物の取付、既存基礎の補強増設工事を



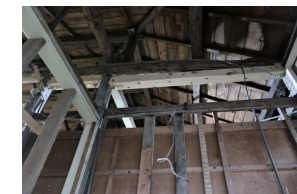
既存柱の建て直しと沈下補正工事



沈下補正した土台



腐朽土台と柱の入れ替え



小屋組の増設補強



小屋組の補強金物取付



小屋組の増設緊結



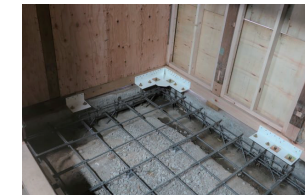
土台の埋木と土台新設



切断されていた土台と柱の復旧



基礎補修と土台継木



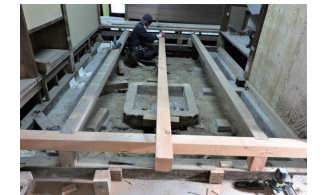
基礎配筋と土台固定金物



新設基礎と土台固定金物



高基礎の補強と土台固定



部屋両側の新增設の基礎



耐力壁と増設した基礎と土台固定



耐力壁取付後の床張


行った。

耐震補強のために既存の脆弱な基礎と数少ないアンカーボルトを改善する為に、耐力壁設置個所以外の既存軸組部分が載る基礎にも補強を施し、代用のアンカーボルトの土台固定用金物を製作し取付。更に、既存の軸組強化の為に金物補強や軸組材の健全化が必要で有る為、工事には手間と忍耐が要求された。地盤沈下による建物の変形を補正したり、腐朽した土台や柱の根継ぎの工事は、伝統的工法の経験と技術を会得している大工でなければ難しい。現在、日本の木造住宅建築業界では、プレファブ化や既成品部材の組付けが主流となり、設計者も施工者も合理化と効率化を優先して、伝統的工法の設計や施工が廃れつつ有る為、今後もこのような工事を行うための技術の継承が大変危惧されている。

(次号に続く)

■山手 133 番館の概要: 山手地区の南東の高台に位置するこの建物からは、広い眺望が開け、かつては眼前に港と海、遠方には房総半島も臨むことが出来た。山手 133 番館は、モダニズム建築家アントニン・レーモンドの作品である可能性が高く、同氏の作品との類似性が随所に見られる。主屋はゆとりのある空間を持つアメリカンスパニッシュ様式の洋館。主屋東側に使用人室棟を備え、旧外国人居留地であった横浜山手の外国人の暮らしぶりを今に伝える秀逸な歴史的建造物である。居住者の記録がよく残されており、戦前から戦後にかけて横浜に本社があった、ライジングサン石油株式会社（後の昭和シェル石油株式会社）や米軍との関係性も明らかになっており、横浜の近代都市史の記録の一役を担う希少な建物である。令和 3 ~ 4 年にかけて横浜市認定歴史的建造物として再生工事が行われた。

オリジナルの上下窓
作業室の西面窓は、この建物で唯一オリジナルで全て残る上下窓。分銅と滑車で釣り合いを取る。他の上下窓はこの窓を手本として復原された。



レンガ造りの暖炉
リビングの壁には、アーチのデザインがあらわれた暖炉を備える。暖炉は、応接間と寝室 2 にも備わる。



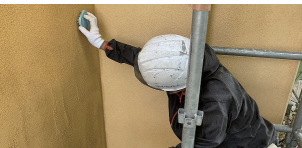
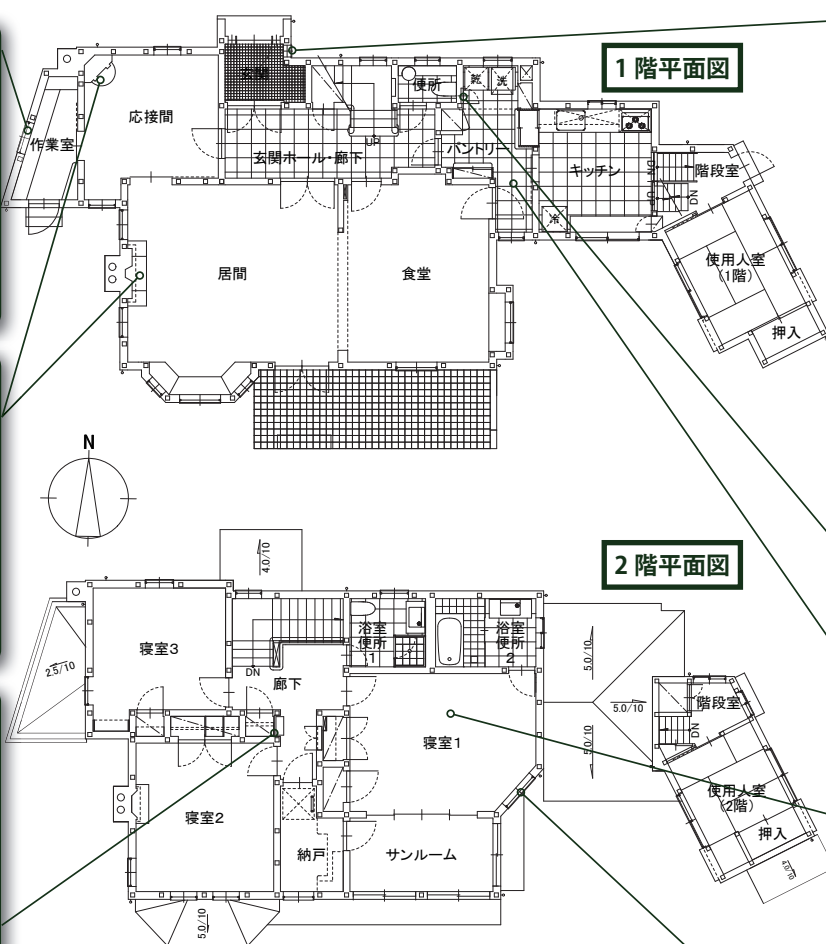
ラジエーター (暖房)
温水を循環させる様式の暖房。ほぼ全ての部屋の窓下に設置されていた。当初は石炭ボイラーで温水を作っていた。リビングと食堂の出窓ベンチ内にも内蔵されている。



フランス瓦・スパニッシュ瓦
横浜の洋館に多く見られる塩焼（しおやき）瓦。表面には、高温で化学変化した潮が赤褐色のガラス状の被膜を作る。主屋には古瓦を整理して再利用している。




外壁リシン掻き落とし
リシンは石灰、セメント、古砂利が配合された左官材料。昭和初期の洋館には多く使われている。仕上は、生け花用剣山で掻き落とす。

ガラリ戸
外壁の窓を日や風から守る目的で備わるガラリ戸。古い 8mm フィルムの映像から色と形状が判明し、復原された。



スチールドア
リビングからテラスへ抜ける所に設けられているのは、この建物で唯一のスチール製建具。繊細な意匠でアントニン・レーモンドのデザインにも酷似したものがある。



玄関のステンドグラス
玄関扉袖壁には、3枚のステンドグラスが備わる。アメリカンスパニッシュスタイルをオマージュし、今回の工事で新設された。「横浜ステンドグラス工房」の作品。




収納式アイロン台
パントリーの壁内にはアイロン台が収納されている。




パントリー
キッチンと食堂の間にある、配膳室、家事室。洋館の生活スタイルを表す特徴。

床のフローリング
2階の床には、創建当初のフローリングが残る。材質はナラ（オーク）材で堅く加工しやすく洋館の床に多く用いられた。

海を臨む上下窓
寝室 1 の東面の窓は、海に向かって斜めに配置されている。大型の上下窓。かつては、東京湾越しに房総半島が見えたと考えられる。



横軸回転窓
横軸回転窓は、換気用によく用いられる。キッチンの南壁のものはオリジナル。他に 2階寝室扉上にも残っている。



昔の姿を取り戻す！
復原工事

